

2．三軒長屋敷地の石垣

2024.10.5

三軒長屋は、田部家事務方の手代や技師長であった村下（むらげ）の住まいでした。敷地の周囲には、石垣が築かれており、現在のものも含め3段階にわたり構築されたことがわかりました。現在の石垣（Ⅲ段階）は、近代の陶磁器が出土しており、明治時代のもものとみられます。この石垣の約1.3m内側では、平行するように古い石垣（Ⅱ段階）が確認できました。さらにこれに直交する石垣（Ⅰ段階）も確認されており、これらは江戸時代のもと考えられます。現在は一面の広い平坦地となっている三軒長屋の敷地は、川辺に石垣を構築しながら次第に広げられてきたのです。



三軒長屋敷地護岸の石垣

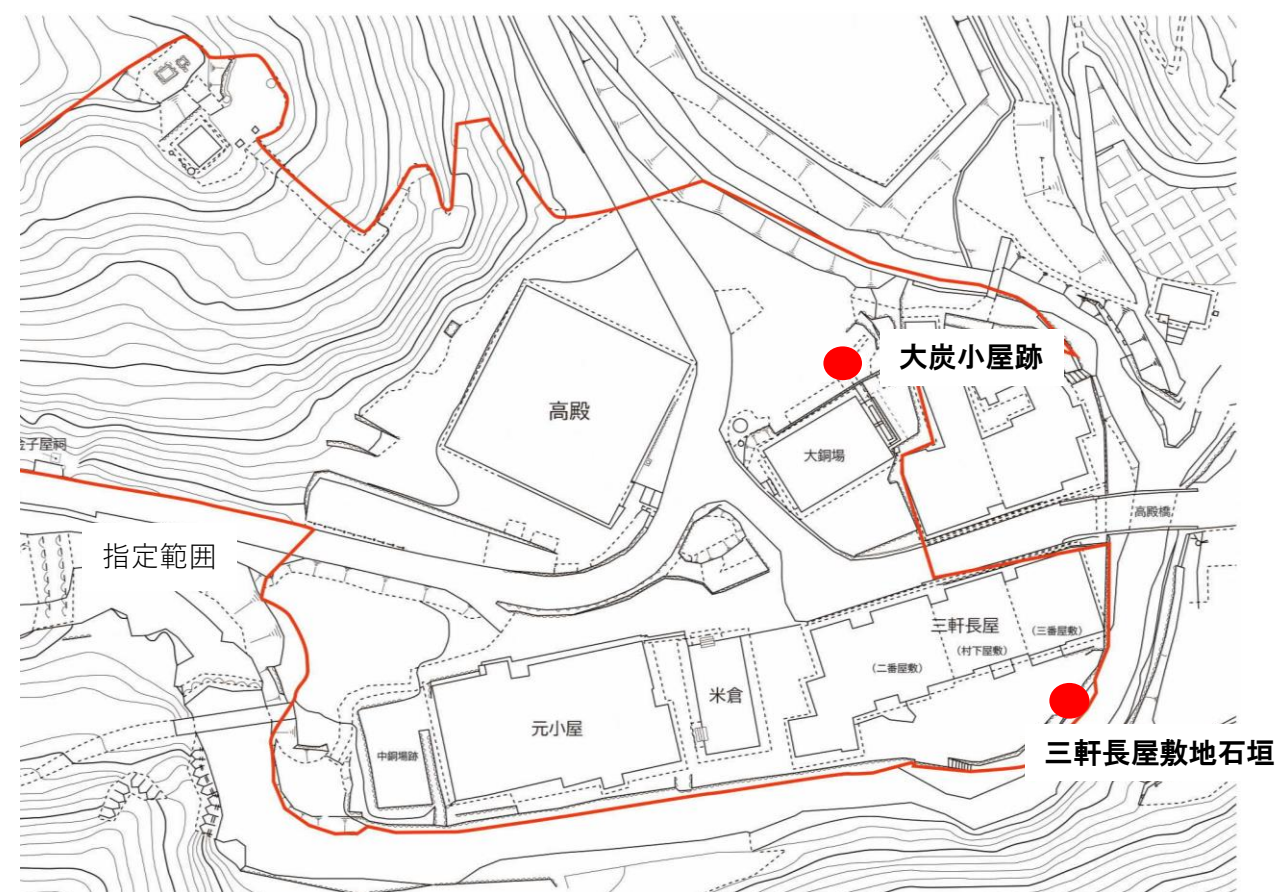
菅谷たたら山内発掘調査現地説明会資料

雲南市教育委員会

菅谷たたらは、松江藩屈指のたたら経営者田部家により、寛政4年（1792）から大正12年（1923）まで操業されました。第2次世界大戦時には、出雲製鋼株式会社が昭和14年（1939）から3年間、操業を行っています。

菅谷たたら山内には、江戸時代終わり頃に建てられた高殿や元小屋、明治時代の米倉などが現存します。昭和42年（1967）に国重要有形民俗文化財に指定され、たたら製鉄が栄えた当時の様子を現在に伝えています。

雲南市教育委員会では、菅谷たたら山内のうち大炭小屋跡と三軒長屋敷地石垣の発掘調査を行いました。調査の結果、大炭小屋跡では田部家操業期・出雲製鋼操業期の建物跡が確認され、三軒長屋敷地石垣の構築は3段階にわたることが判明しました。



菅谷たたら山内の発掘調査地点

1. 大炭小屋跡

たたら製鉄では、1回の操業に約13tの砂鉄と大炭を必要としました。大炭はマツなどの幹を160cmあまりに切り、炭窯で完全に炭化しないよう焼いたものです。田部家は、年間50～60回操業しましたので、大量の大炭を保管するため大炭小屋が3ヶ所にありました。

水車鞆が導入された明治39年（1906）～大正12年（1923）の山内を描いたとみられる「菅谷製鋼所平面図」には、高殿に近いところに「第壱蓄炭場」が記録されています。昭和14年（1939）からの出雲製鋼操業時にも、同じ位置に大炭小屋があり、昭和40年代までは残っていました。



「菅谷製鋼所平面図」（田部家蔵）



昭和40年代まで残っていた大炭小屋

大炭小屋の敷地は、元は川に向かって傾斜する斜面だったようです。そこに石垣を積み、たたら操業で排出された鉄滓で埋めて、平らな敷地が造成されています。この場所にいつから大炭小屋があったのかはわかりませんが、製鉄に使う大炭を運びやすいように、高殿の近くに施設が整えられていったようです。大炭小屋は、大正時代に田部家の操業が終了した後、一旦は撤去され、出雲製鋼が操業を再開する際に再び建設されたものと考えられます。

発掘調査では、大炭小屋に蓄えられた木炭の痕跡である炭層が上下2層になって確認されました。下層は田部家操業時のものとみられ、建物は地面に穴を掘り柱を立てた掘立柱です。撤去された際に柱を抜き取った痕跡が残っており、調査地点は大炭小屋の東端に当たります。柱穴は、桁方向に1間、梁方向に2間分確認でき、幅4mほどの建物であったと考えられます。炭層は厚いところで15cmほど残っています。

上層の炭層は、出雲製鋼操業時のものとみられます。大炭小屋は、記録より長さ11m・幅6mほどであったことがわかり、現在も建物南辺の石列が露出しています。この石列は下層木炭層の上に敷かれた整地層に伴うものであり、田部家の大炭小屋跡を整地した後に構築されたことが明らかになりました。



田部家操業期の大炭小屋跡